

序文

人類が宇宙に進出してはや数世紀が過ぎた。西暦2712年、人類は幾多の危機を迎えたが、それを乗り越え、いまのところ繁栄を謳歌している。

人類のあり様は、この200年ほど劇的に変わった。既に半径数百光年の活動領域を持つ人類には、神（と呼ぶものがいたならという話だが）から授かった身体は脆弱すぎた。故に自らの遺伝子の仕組みを解明した人類は、それを進化させるべく改良していったのである。見た目は数百年前とほとんど変わらないが、その中身は劇的な変化を遂げている。様々な能力を発現させる遺伝子コンポーネントが開発され、人間のDNAに移植されるようになった。また、生物としての人間の弱点を補強するような機能、たとえば宇宙放射線への耐性を高めたり、高い重力に耐えたりするためのコンポーネントなども導入され、人類はこれまで生存が不可能であった環境へも進出しはじめている。最も劇的に人類の生き方を変えたもの、それが生体機能拡張インターフェイスと呼ばれるコンポーネントだ。たとえば、視覚や聴覚といった五感と電子的に処理された情報を統合し、数世紀前にはインターネットと呼ばれたもの、いまは「ヴァーチャルユニバース」ⅡVU（ヴィユー）と呼ばれているものと一体化させる。これにより、電子化された様々な機器の制御や、それらから得られる情報の受け取りを自然な形で行う事ができるのだ。

たとえば、移動手段だ。自動車、といっても昔のイメージとはかなり異なるが、これを運転するには、それに乗り込むだけでいい。自動車はその人間が自分を運転できる資格を持っているかどうかを、生体機能拡張インターフェイスとの通信によって確認し、視覚インターフェイスに自動車の運転に必要な情報をフィードバックする。さらに、必要ならば四肢と五感に関する感覚インターフェイスを拡張し、自動車と肉体との間に感覚的な一体感を形成する。これによって運転者は、たとえば障害物や他の車との間隔を、それが、自分の五感の外にあったとしても、実際に自分の近くに実在するものとして感じる事ができるのだ。

そして、実際の運転にはいくつかの選択肢がある。行き先を言葉にして自動車に指示する、というのが一番簡単な方法だ。いまでは、この機能を使って小学生でも一人で車に乗る事が出来る。もちろん、行き先などの選択肢はあらかじめ親がインプットしてあるものに限られる。単に車を移動手段としてのみ考えるならば、これで十分である。

しかし、より刺激的な運転方法もある。ある年齢に達して、必要な訓練を受けると、基

本的なバーチャルドライビングインターフェイス（VDI）の使用が許可される。これによって、自分がハンドルやアクセルを操作している感覚を仮想的に得ながら運転する事ができる。大昔の車で言えば、オートマチック車程度の運転感覚は得る事ができ、マニュアル運転が許可されている道路で交通ルールを破らない範囲で自由に運転ができる。ただ、考えただけで車を動かせるわけではない。仮想的なイメージとして意識に投影されたハンドルやアクセル、ブレーキのようなものを手足、つまり運動神経を使ってこれまた仮想的に動かすという面倒な事をしなければいけないのだ。

これは一種の安全措置である。念じれば動くという実装はたやすいが、人間はそれほど簡単に雑念を払えない。たとえば、うっかり余計な事を考えたために車がとんでもない動きをする、という事がないように、一旦、思考を身体の動きに置き換えるというステップを入れておくわけだ。もちろん、これら意識に投影された機器の操作に対しては、適切な操作感が触感や抵抗力などとしてフィードバックされる。

自動車を含め、通常の生活の中で必要になるコンポーネントは、基本コンポーネントとして、今ではあらかじめ、すべての人間に組み込まれている。およそ200年前になるが、生まれてくる子供のすべてが、この形質を獲得できるように、親となるすべての成人の生殖細胞に対して遺伝子操作が行われた。以降、この機能は人類共通の遺伝的機能となったのである。

しかし、科学技術はどんどん進歩する。基本コンポーネントに含まれるインターフェイスだけでは対応できない技術が生まれた場合、最初の段階では、これらのインターフェイスコンポーネントは、たとえば自動車の場合はメーカーからオプションとして提供される。人にこのコンポーネントを移植するには、選択的に特定の部位の細胞にだけ、この遺伝子を導入し、必要な機能を追加成長させるという方法がとられる事が多い。ただし、この機能は一代限りである。一方、親たちは子供を作る前に、あらかじめ自分たちの生殖細胞に新しいコンポーネントを加えておく事ができる。そうすれば、子供たちは生まれながらにして、そのコンポーネントを持つ事ができ、そしてそれは、その子孫にも受け継がれていく事になる。

一般的になってしまったコンポーネントは、やがて基本コンポーネントに加えられ、次世代の子供たちから標準機能となる。しかし、過渡期においては、経済的に余裕のある層のみが、新しい機能を得る事ができる。これは、新たな格差を生み出す原因になる。親たちは、自分の子供に、出来る限りの新しいコンポーネントを与えたいと願うものだ。こうしたコンポーネントは一般にかなり高価なので、そこに貧富による格差が産まれ、次の世代で能力の差によって、さらに貧富の差が拡大するという悪循環の懸念が生まれた。

だが、遺伝子コンポーネントはあくまで機能でしかない。それをどこまで使いこなせるかは、その本人の資質、つまりは本来の能力の問題であり、この部分だけは遺伝子工学がここまで進歩した現在でも謎のままである。つまり、持って生まれた資質によって、同じ機能を持つ人間でも差異が生まれるという事なのだ。神と呼ぶべき者がいたとすれば、それは人類を生み出す際に、こうなる事を予想していたのかもしれない。なぜなら、新しい機能は作れても、人としての本質は、いまだブラックボックスのままなのだから。

(アンリ・ガブリエル著「第二創世記の始まり」より)